

受験者・合格者の属性

共通第1次学力試験施行後、各大学とも世に
いわれている受験者層の輪切り現象や国立大学
ばなれ等に意をはらうと同時に、今後の入学者
選抜方法の改善や大学教育の見直しに関連し、
受験者・合格者の属性についての基礎的資料を
集め、調査を続けている。

出身都道府県別の調査では、共通第1次学力
試験の実施後も変化のなかった大学もあるが、
一般には地元志向の傾向がみられる。この傾向
は続くと考えられているが、さらに強まる結果
は出ていない。

現役と浪人の比較調査では、共通第1次学力
試験の導入で現役の合格者に増加がみられるが、
合格率では概して、1浪>現役>2浪の順であ
る。しかし、国立医科大学のいくつかでは合格
率が、現役=1浪=2浪となってくる傾向がみ
られている。

受験者層と合格者層等の比較に関連した調査
では、受験倍率の減少した大学・学部で、受験
をとりやめた受験者層が共通第1次学力試験成
績の低いところで生じており、現在の時点では
合格者の成績の低下にはつながっていない。し
かし、さらに極端に倍率が低下すると、合格者
の成績にまで影響が生ずる危惧があるので、倍
率を確保すべき対策の必要性を考えている報告
もみられる。一方、入試科目の増加（例えば外
国語や数学）が受験倍率の減少をもたらしが、
合格者の質の変化は必ずしも低下せず、自信の
ない受験者層が去ったと解析している。これら

のことは現代の学生気質あるいは学生像の一面
とも解され興味がある。受験者に対する高校の
輪切り指導が進行しているとは思われないとし
ている大学もある。一方、標準偏差比や受験者
の標準偏差が小さくなっていることから、いわ
ゆる輪切り現象が強まっていると判断している
大学が多くなっている。これらの大学のなか
には、憂慮すべき現象ととらえ、配点比率、推薦
入学等を含め、入試のあり方を真剣に検討しな
ければならない時期にきていると判断している
ところもある。

入学辞退者についての調査では、大学・学部
によって異なるのはもちろんであるが、概して
やや減少傾向を示しており、落ち着いてきたと判
断される。辞退の理由は第1志望と異なること
や将来の就職を考慮しての公立・私立大学への
進学が大半である。合格発表日を早めることで
辞退者が少なくなったとの報告もある。辞退者
は受験成績には関係がないとする解析が多く、
一・二の例外として受験成績の下位の者に多くみ
られた大学・学部もあった。県外現役合格者に辞退
が高率にみられる大学も多く、この場合、すべり
止め受験と見なせるケースが多いと考えている。

第2次募集に関連した調査では、合格者のう
ち1浪が現役より多く、また、入学辞退者につ
いて見ると、第1次募集では合格成績順位に関
係なく生じているのに、第2次募集では合格成
績上位の者に辞退が集中している結果がみられ、
注意しなければならないだろう。